

戦後の歴史をたくましく走り抜き、積み重ねた実績と信頼、そして人材が財産。いつの時代も大切なのは、心の教育とコミュニケーション。

有限会社松尾運送 (国分支部)



代表取締役社長 松尾 君男さん 取締役専務 松尾 透さん

有限会社松尾運送

本社／霧島市国分広瀬512-1
 代表取締役社長／松尾 君男
 従業員数／65名
 保有車両／84台



「夢とたたかいながら、強気一本でやってきた」。戦後の復興、経済成長という歴史の荒波を生き抜いてきた、現場を知り尽くした社長が問い続ける、こころの教育。



戦後、名古屋で西濃運輸株式会社の本社に勤務し、浜松・大阪間の長距離ドライバーを務めていた松尾君男社長が垂水牛根に帰郷し、松尾小型運送を創業したのがスタート。当初は主として農協の仕事を受け、牛根から国分まで木炭や肥料を運んでいた。

転機が訪れたのが26歳の頃。当時垂水で栽培が盛んだったビワを出荷する時期に、国鉄(現JR九州)のストライキが長引いたのだ。その頃はまだ舗装もされない悪路が多いうえ、トラックのクッション機能もなかったため、荷痛みが懸念されたが、収穫した青果を全滅させるよりは、と松尾社長のトラック便に白羽の矢が立ったのだ。長距離ドライバーとして鍛えられた腕が物を言って、ビワの荷痛みもなく、荷主と農家に喜ばれた。その出来事がきっかけとなし、地元の青果物を鹿児島だけではなく大阪、東京へと輸送する仕事の受注へとつながっていった。

昭和45年、念願の区域免許を取得し、昭

和50年には空港が溝辺に移転するのを機に国分へ会社を移転。平成8年に4,000坪の用地を得て現在地に社屋を移した。現在、青果物、食肉、食鳥を首都圏へ輸送するほか、静岡、大阪の器械製品の保管・輸送業務、また東京で発行される出版物の県内への幹線輸送一手に引き受けている。いずれも松尾社長が創業以来、築いてきた取引関係だという。長年、積み重ねてきた信頼の証左である。

「夢とたたかいながら、強気一本張りで働いてきた」と松尾社長。戦中、戦後を生き抜いてきた言葉には重みがある。時代を眺めてきていま、社会から道徳意識が薄れていることに危機感を抱いている。「自分の利益と権利ばかりを主張する姿勢には感心しない。仕事においても、クルマを運転するときも、自分だけを押し通すのではなく、相手に道を譲ることも必要じゃないでしょうか。感謝の心、親や先祖を敬う心の教育を見直す時期に来ている、と松尾社長は考えている。

従業員に対しても、家庭を大切に、と説いている。「家庭環境がしっかりしていないと、仕事に専念できないし、うちは長距離が多いので、万一の事故などの場合に連絡がつかないと困りますから」と、長男である松尾透専務も話す。雇用にあたっては、人柄重視だ。

「乗ってきたクルマを見れば、だいたいのことは分かります」。クルマを改造したり、車内が散らかっていたりする人は、仕事ぶりにも期待はできないという。さらに従業員に求めているのは、免許証を大事にする、ということ。免許証を大事にする、ということ、違反や事故をおこさない、ということである。

「免許証はドライバーの命。違反や事故で失うようなことがあってはならない」。同社では毎年、交通安全センターから全社員の運転記録証明書を取り寄せ、チェックする。就業時間内はもちろん、プライベートでも優良ドライバーでなくてはならないのだ。記録は給与やボーナスの査定にも反映する。日ごろの指

導や毎年開く講習会などの成果により、違反や事故も近年、ほとんど起こっていない。会社としても安全対策には早くから力を入れており、9年前には義務化に先んじて、メーカーと共同でスピードリミッターを開発、搭載している。

「良い人材はお金で買えない財産です」。現場を知りつくした社長は、日ごろから従業員とのコミュニケーションを図っている。さらに2年に一度の海外への社員旅行も実施し、社員同士の親睦と連帯も図っている。横のつながりがあるということは、遠方でのトラブル時に連携をとるためにも、心強く、大切なことだ。努力に応じた社員への還元と、しっかりした気持ちのつながり、絆が特徴の企業体である。平均勤続年数14.2年(H18.11月同社の調査による)という数字が、それを物語っているようだ。



シンボルカラーはグリーン



倉庫管理・出荷業務もやっている



海外への社員旅行で親睦と連帯を図る



永年勤続表彰式の様子



本社事務所